



【登場人物】

桐壺帝・・・狛犬を配した玉座
に足元だけが見える
左大臣・・・光る君に向かって座る
光る君（元服前の源氏の君）
・・・赤い着物の少年

【場面解説】

浄土寺本で、初めて源氏の君が登場するのは「桐壺」の元服の場面です。桐壺帝と桐壺更衣の間に生まれた第二皇子はその輝くばかりの美貌から「光る君」と呼ばれます。身分の低い更衣から生れ、幼くして母と死別し後ろ盾のなくなった皇子の将来を案じ、父の帝は泣く泣く臣下に降ろし源氏の姓を与えます。内裏の清涼殿で行われた元服の式は、第一皇子に負けるとも劣らぬ盛大なものでした。愛する若宮の将来を託し、加冠役選ばれたのは頭中将、葵の上の父の左大臣でした。

帝のお顔は描かないという当時の風習にのっとり足元だけ描かれた桐壺帝の正面に、みずら姿の光る君、相對して左大臣が描かれています。左大臣の手元に描かれたものや下書きの線は、描きかけの冠なのでしょうか。

光る君、輝く日の宮と並び称された母代りの藤壺宮の忘れ得ぬ面影を胸に、大人への一步を進む光る君。ここから源氏物語の同大な物語が始まります。

【現代語訳】

そなたが加冠の大臣
として幼い我が息子
が初めて髪を結ぶ
元結に、そなたの娘
（葵の上）との末永い
契りへの願いをこめ
たであらうか。

【詞書】

ことばがき

扇面に書かれている文字

いとまきなまき
はつもとゆひにながき世を
らぎる心は
むすびこめつや

（桐壺帝から左大臣への和歌）